

2023 年 3 月 28 日

資料館通信 第 83 号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮 1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央 2-19-5 TEL 049-263-3111

史料紹介 文化 10 年「吉野氏由緒書」

地域史料としての由緒書 令和 4 年度資料館特別展「武士の群像 ふじみ野の中世 フロンティアの時代」（会期：令和 4 年 10 月 25 日～12 月 11 日）を開催し、武士政権を確立するとともに、郷土の開発を進めた武士たちの姿を紹介しました。

その中で、吉野氏は福岡郷（江戸時代の福岡村）に戦国時代に移住し、小田原城を拠点とした戦国大名北条氏に小代官として仕え、江戸時代には名主として農民たちを統率して福岡村の基礎を作った人々として紹介しました。展示では吉野氏の歴史を記した由緒書についてあまり触れることはできませんでしたので、ここではその内容の解説をしたいと思います。

戦国時代から江戸時代初頭、ふじみ野市域には様々な人々が移住し、農地の開発を進めてきました。彼らの多くは武士としての側面と農民（百姓）としての側面を持っていました。大井郷（大井村）は新井氏・塩野氏・小林氏（大井四人衆）、苗間は神木氏、亀久保は三上氏が移住して開発が進められました。



◆文化 10 年
吉野氏由緒書
（個人蔵）

滝地区に伝来した由緒書で、上が冒頭部分で、下が末尾部分。

最後にこの由緒が一族・子孫に間違い無く伝わるように記したことが第 9 代当主吉野善左衛門により記されています。

なお、与八は福岡河岸の回漕問屋吉野屋、三之助は江戸屋の当主です。



彼らの多くは戦国時代後半＝16世紀後半に日本各地から戦国大名北条氏の保護を求めたり、天正18（1590）年の北条氏滅亡後に農地拡大のために開発者としての武士・農民を募集する新領主徳川氏の招きに応じるなどして、ふじみ野市域にやってきたことが記録されています。

これらの動きを記録した資料が「由緒書」（家や集団の来歴を記した資料）と呼ばれています。吉野氏は、権現山古墳群を含む雑木林を北に背負った南向きの斜面に屋敷を構え、主屋・長屋門・土蔵が建てられた伝統的な農家の屋敷構えを持っていました。

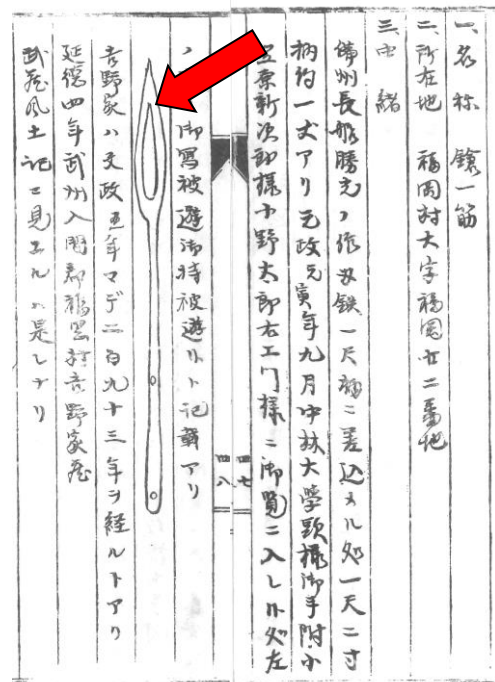
江戸時代に幕府が編さんした地誌『新編武蔵風土記稿』では「旧家者又六」（又六を襲名する当主が多かった。）という項目を設けられ、吉野氏は家系や家の由来を伝えてはいないこと、備前長船（現在の岡山県にあった名刀の産地）の刀鍛冶勝光作の槍や薙刀、戦国時代の古文書3点が伝えられていることが記されています。

現在はこれらの槍や古文書の所在は不明ですが、大正元年の『入間郡福岡村郷土誌』（富田福治氏著）には、古文書や槍のイラストが掲載されるなどしており、大正時代初期までは存在していたと思われます。

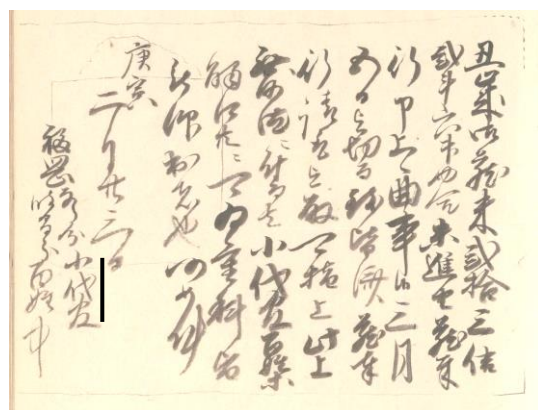
滝の吉野家と下福岡の吉野家には、多少の差異はあるものの本文の内容がほぼ同一の吉野家由緒書が伝えられています（いずれも個人蔵）。滝地区に伝わる由緒書は江戸時代後期の文化10（1813）年の作成で、下福岡地区のものも時期的には同じ可能性があります。

由緒書の内容 これらの由緒書によれば、吉野家は清和源氏出身の多田満仲（撰津源氏。源頼朝は河内源氏）の三男多田大内蔵光政の子孫とされる。光政は大和国（奈良県）吉野に館を構え、多田氏の名前を有名にしようとしたしましたが果たせませんでした。その子孫は「多田」から「吉野」に苗字を変え、鎌倉時代の宝治年間（1247～1249年）に信政という人物が関東に来て葛飾郡本所（墨田区）に満仲を祀った薬師堂（天台宗東江寺）を建てたといいます。なお、東江寺の参拝のしおりによれば、本尊は『往生要集』で有名な平安時代の僧侶恵心僧都の作とされる薬師如来像で、多田満仲の念持仏とされました。多くの人々の手を経て徳川家康の関東移封に伴って堺（大阪府堺市）から江戸に移されたということです。薬師如来像は「多田薬師」と呼ばれて信仰を集めました。大正12（1923）年の関東大震災により、本尊は避難することができましたが東江寺は大きな被害を受けて現在の葛飾区金町に移転しました。

さて、本所の地は奥州街道が通る交通の要衝で信政は陣屋（館）を築き、塚を作って貴布祢神社を祀りました。信政の子孫満祐は室町時代の永享10（1438）年に「義教」を討ったとされていますが多田氏の再興はかないませんでした。なお、義教は室町幕府第6代将軍足利義教を



◆吉野家に伝来したと伝わる備前長船勝光の槍（『入間郡福岡村郷土誌』）



◆天正18(1590)年 北条氏印判状写
江戸幕府編さんの『武州文書』に記録された吉野氏所蔵の北条氏からの御蔵米納入の指示文書。「小代官」（傍線部）は吉野氏を指すと思われます。

（国立公文書館所蔵・写真提供）

◆文化一〇（一八一三）年 吉野家由緒書（滝地区に伝来）

当家吉野家之姓ハ、辱も清和天皇六代之孫多田満仲公之三男多田大内蔵光政之後胤也、光政和州吉野に館を囲江再度多田家を興さんと謀り玉へ共、不得時をして万寿二年六月十八日卒志玉ふ、後之孫者郷土と成多田を世に隠さんがため苗を改吉野之と宝治年中に信政東国に下向し当国葛飾郡に足を留メ草堂を造り満仲公之御守本尊薬師尊像を安置したてまつり今之本所多田之薬師尊也、其所昔しハ奥州街道にて住憂くして当処に來り武蔵大野ハ能キ隠家なりとて陣屋を創、陣地に塚を築き光政之産神貴布祢大明神を安置したてまつり永久守護神となり玉へと禱りをこめ玉へ候而今之城塚是也、信政永仁二年に卒し其後之孫満祐永享十年ニ義教將軍を殺すといへ共軍開かざるにや多田の旗挙くる事あたわす、復当所江立帰り世を送り、子孫資祐之後胤善九郎政康（下福岡地区伝来の由緒書の記述にはこの箇所に「□□之時ハ天文六年川越戦發し候□□世乱れたるにより物憂しとて政康」の文言が挿入される）爰を打立京都江登り身生之辺にすまひをなし世を忍ひ候而継子典膳是政も兎角多田之旗を挙げたき思ひ二而良士共召具すといふ共、身体二不叶依而信政満祐資祐之旧所を慕ひ、弘治年中に再当国江立帰り城跡古塚ヲ辱貴布祢之祠を立、自宅ハ今此所江造作名所ハ帛吉野之清明滝をなぞらへ滝と号す、割元小代官を務む併し方当家代々打続き分地孫分地追々相増し吉野一統今数家といふ其旧跡古塚の祠ハ其何頃方破壊せしか当世者空舗塚而已残り思ひ知る、吉野一統当所にて彼の城名所古塚に本つき君を重し尊靈も亦胤孫を慇ミ玉ふ御心輕からずして銘々家内繁昌子孫長久之御守ある事、依之此度昔を崇め御大祖之姓恩を忘れたるため分家一門姓名連面永々大本家江納置者也

多田之後胤当所住居九代之主

本家 吉野善左衛門 丈政（花押）

文化十癸酉年十二月

分地家之面々

当半兵衛方跡式當時弟与八方預置候二付代印

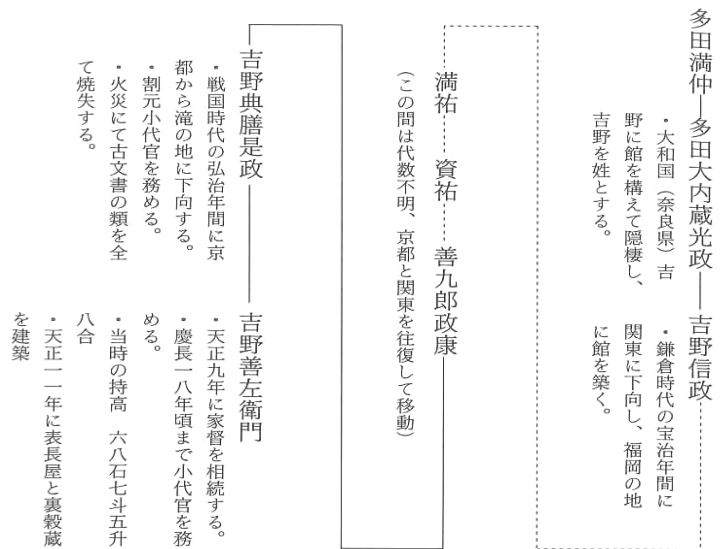
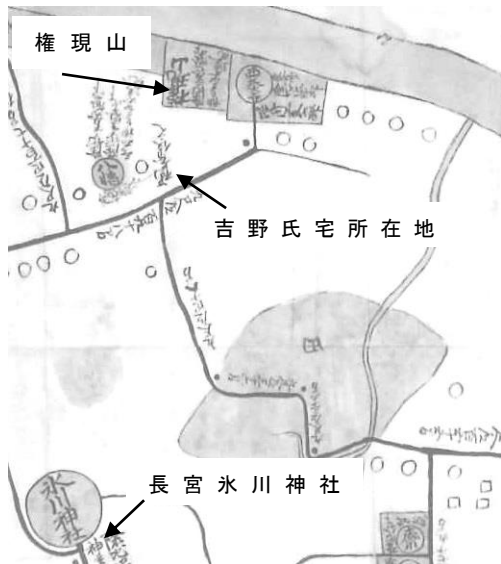
吉野半兵衛（印）	吉野伝之助（印）
吉野長次郎（印）	吉野伝之助（印）
吉野友右衛門（印）	吉野半蔵（印）
吉野政右衛門（印）	吉野元庵（印）
吉野忠五郎（印）	当家丈政方苗字斗免之候
吉野平八（印）	吉野奎右衛門（印）

右分地家方子孫分地家面々

吉野安五郎（印）	吉野伝左衛門（印）
吉野利右衛門（印）	吉野伊左衛門（印）
吉野清右衛門（印）	吉野与八（印）
吉野佐五右衛門（印）	吉野三之助（印）
吉野藤左衛門（印）	吉野惣兵衛（印）
吉野多四郎（印）	吉野沢右衛門（印）
吉野喜三郎（印）	吉野永次郎（印）
吉野権蔵（印）	吉野清蔵（印）
吉野幸右衛門（印）	

前書当家吉野之御先祖之産神貴布祢大明神之古塚我等方二而龜抹之取扱後悔前面共江申聞候得ハ、私共連も不行届勝何卒社再興被成、猶又幾々子孫共心得違不致候様二連印形入レ置度旨一同申候二付御刻候以上

吉野善左衛門（印）



◆寛政6（1795）年三福岡村に現れた吉野氏宅所在地（富田家文書）

◆吉野氏由緒書等から作成した吉野氏系図

指すと思われますが、義教は嘉吉の乱（1441年）で播磨（兵庫県）等を治める守護大名赤松満祐に暗殺されました。記されている永享10年は足利義教と対立した鎌倉公方足利持氏が反乱を起こして滅亡した年です。吉野氏の当主の名前が嘉吉の乱を起こした赤松満祐と同じだったため記述に錯誤が生じたかと思われれます。その子孫は戦国時代に再び関東にやって来ましたが天文6（1537）年に河越合戦が起こるなど戦乱は続きました（この記述は下福岡地区に残された由緒書によります）。そこで善九郎政康は京都の身生（京都市の壬生か）に隠棲しました。その養子典膳是政は同じく戦国時代の弘治年間（1555～1558年）に再び関東に下り、貴布祢の社などを建て、現在の滝の地を吉野の清明滝の場所に見立てて「滝」と名付けたといひます。そして北条氏に仕えて「割元」（有力な名主）・「小代官」を務めたということです。戦国大名北条氏が滅亡すると、吉野氏は農民になる道を選んで川越藩領福岡村の名主を、江戸時代全般を通して務めました。

由緒書によれば吉野氏の動向は転変めまぐるしく、嘉吉の変と錯綜して記述されているなど、検討・確認を要する資料ではありますが、中世の戦乱の中で京都と関東を往復する武士たちの姿を想像することができます。さらに滝の吉野家には由緒書の他に家系図の所在も確認されており、それらとあわせて吉野氏と福岡村の歴史を解明する手がかりとすることができます。また、由緒書末尾には本家分家29人が連名して吉野家の由緒を確認し合っており、江戸時代後半の家どうしの関係をうかがい知ることができる資料でもあります。最後に、由緒書所蔵者の方々と解説に御協力いただいた大井古文書の会の伊従尚孝氏には厚く御礼申し上げます。



◆左：昭和40年代の吉野氏住宅主屋

◆上：現在の多田薬師東江寺（葛飾区金町）

大井小学校の忠魂碑とシベリア出兵

大井小学校の忠魂碑 もうじき創立 150 年を迎えようとする大井小学校ですが、その校庭の一角に今から 101 年前の大正11（1922）年に大井村が建立した忠魂碑（戦没者の慰霊・顕彰のために建てられた石碑）が建てられています。揮毫（きごう）は白水淡（しろうずあわし）陸軍中将によるものです。揮毫とは、著名人や書家が依頼により格言や碑文などを毛筆で書き上げる事をいいます。

揮毫した白水中将は、文久 3（1863）年福岡県春日村に生まれました。明治中頃に陸軍士官学校に入学、日清・日露戦争などに将校として従軍し、明治から大正へと変わる頃に少将へと進級しました。その頃から揮毫を求められる様になっていたようで、出身地の福岡県各地には揮毫した記念碑が残されています（『福岡県の戦争遺跡 文化財調査報告書 第 274 集』）。

白水中将と郷土兵 白水中将は、第一次世界大戦（大正 3 ～ 7 年＝1914～1918 年）に続いて発生したシベリア出兵（1918～1922 年）に第十四師団師団長としてロシアに出動し、内戦の混乱の中で 1920 年 3 月に在留邦人が多数殺害された尼港事件（にこう＝ニコライエフスク）事件にも対応しました。シベリア出兵では、日本は 7 万人に及ぶ兵士をロシアに上陸させました。大規模な軍の派遣だったため、ふじみ野市（当時は大井村と福岡村）から従軍した兵士もあり、軍事郵便や写真集なども残されています。また、ふじみ野市からは少なくとも 2 名の戦没者が確認できます。1 人は第十四師団がいたハバロフスクで、もう 1 人が亡くなった場所は不明です。

白水中将がふじみ野市の忠魂碑の揮毫を引き受けた経緯はわかりませんが、ハバロフスクで亡くなったふじみ野市出身の兵士の上官であったことが揮毫を引き受けた理由だったのかもしれませんが。このように大井小学校の忠魂碑からは、大正時代の戦争やそれを取りまく世界情勢、厳寒の地で亡くなった郷土の人々、多くの日本人の姿に想いをはせることができます。



◆左：シベリア出兵の指揮官たち 左上が白水中将

◆右：大井村出身の兵士が所属した工兵第十四大隊第一中隊第一小隊の記念写真

（『西伯利亚派遣軍記念写真帳』 大井郷土資料館所蔵）



(いずれも大井郷土資料館所蔵)



(射武長岡師本白) 砲軍射機行機機砲

◆上：前線で機銃を構える白水中将（絵葉書）

◆左：ロシア帝国皇帝・皇后及び皇太子写真

左上からロマノフ朝第14代皇帝ニコライ2世、右上が皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ、下中央がアレクセイ皇太子。1917年のロシア革命以前に印刷されたもので、シベリア出兵従軍の兵士が現地で入手したと思われます。

皇帝一家はロシア国内の内戦の中で、1918年7月17日にソビエト・ロシアの秘密警察（チェーカー）により悲劇的な最期を遂げました。

ふじみ野市の両資料館への資料の寄贈

令和4年3月から令和5年3月まで次の方々より、各種の文化財資料を寄贈していただきました。紙上をもって厚くお礼申し上げます。

市立上福岡歴史民俗資料館分

5月4日	内裏雛	1点
	市内 富田文隆 氏	
6月22日	絹糸（戦前）	1 綴
	ベークライト皿（戦前）	3点
	市内 小坂部雅美 氏	
9月6日	大阪毎日新聞（昭和17年）	6部
	市内 中野多鶴 氏	

市立大井郷土資料館分

5月13日	長篇（市内生産）	1点
	短篇（市内生産）	1点
	市内 渋谷芳久 氏	
5月17日	大井音頭発表会プログラム	2点
	市内 須田 豊 氏	
5月31日	碁玉算盤	1点
	市内 渋谷芳久 氏	
8月31日	広報おいNo. 6 7 1号	1点
	市内 須田 豊 氏	
8月31日	盆だな（戦時中墨書あり）	1点
	市内 塩野泰弘 氏	
9月1日	電子レンジ（昭和40年代）	1点
	市内 三上栄一 氏	
3月9日	欧文タイプライター	1点
	市内 内藤勝由 氏	

